「お世話になったすべての方に甲子園で恩返しがしたい」

野球にかけた3年間

感染予防対策で対面インタビューができないため、今回は電話で現在の思いを聞きました。

駿選手が野球の道へ進むことになったきかけは、小学1年生から始めたソフトボール。当時6年だった兄・麟さんが田代ソフトボール少年団でプレーしていたことが影響します。家の近くに同年代がいなかったこともあり、キャッチボールの練習相手は祖父母。「一輪車を壁にしてばあちゃんを座らせピッチングの練習をしていた」と当時を振り返り、目を細める竹下さん。入団当初は体も小さくルールもまったく知らなかった駿選手。

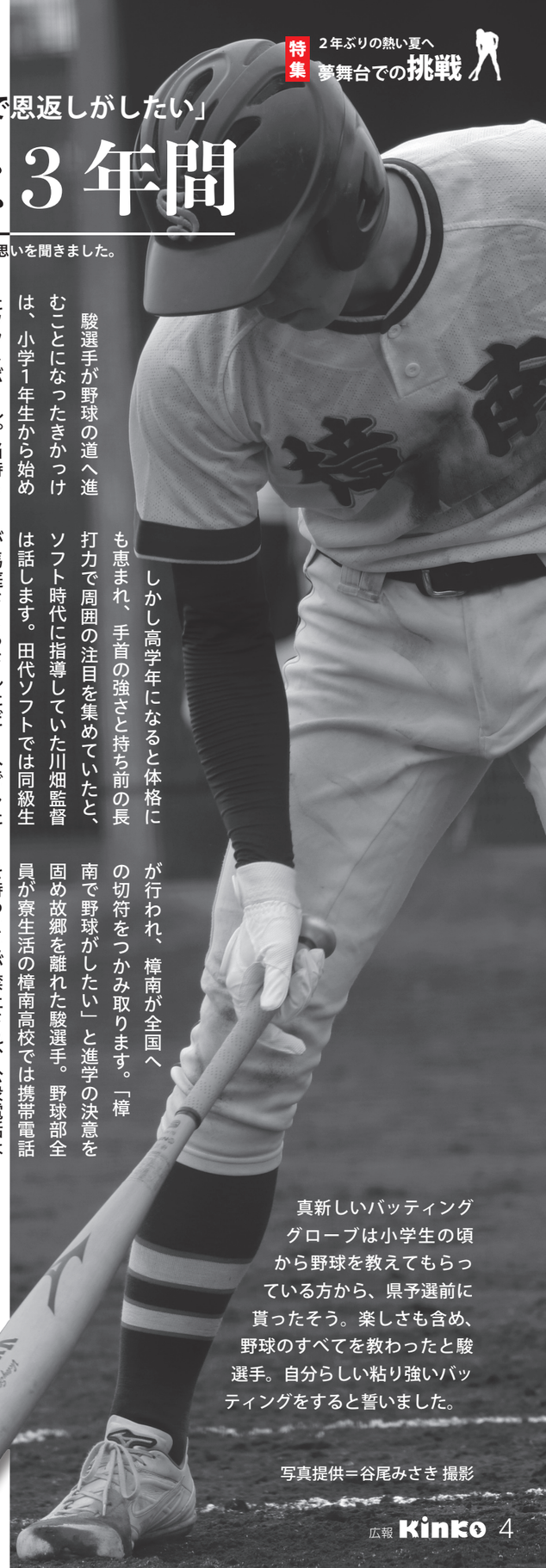
しかし高学年になると体格にも恵まれ、手首の強さと持ち前の長打力で周囲の注目を集めていたと、ソフト時代に指導していた川畑監督は話します。田代ソフトでは同級生が馬庭さくらさんただ1人でしたが、田代中では同級生の男子全員が野球部に入部。単独でチームを組み、試合に出られることへの感謝の気持ちは、今でも忘れることのできない「自分の原点」と駿選手は答えます。

樟南高校で甲子園を目指したい 憧れだった夢舞台で恩返しを——。

樟南高校への進学を決めたのは、5年前。史上初となる樟南対鹿実の決勝再試合だったと振り返ります。1対1のまま延長15回を迎え、4時間もの死闘を繰り広げますが決着はつかず再試合。翌々日に再度決勝戦が行われ、樟南が全国への切符をつかみ取ります。「樟南で野球がしたい」と進学の決意を固め故郷を離れた駿選手。野球部全員が寮生活の樟南高校では携帯電話を持つことが禁止され、公衆電話は1回5分まで。帰省は年2回という野球中心の生活が続きます。「その分、仲間同士の絆は強く互いの性格も知り尽くしている。裏表もないのが強み」と駿選手は胸を張ります。

しかし、2年生でレギュラー入りした昨年は新型コロナの影響を受け夏の甲子園は戦後初の中止。挑戦すらできなかった先輩たちの分まで背負い、今年にかけてきました。寮長も務める駿選手。「きついときこそ笑顔で声を出すことがチームの目標。練習でも声をかけ合い、みんなで乗り越えてきた」と自信を覗かせるのも納得の笑顔は、テレビの画面越しでもまっすぐ伝わってきます。

「さくらが同級生からメッセージカードを集めて届けてくれました。本当に嬉しくて泣いた。野球ができること、これまで支えてくれた方へは感謝しかありません。甲子園で活躍する姿を見てもらうことで、育ててくれた錦江町へ少しでも恩返しできれば」と電話越しに熱い胸の内を語った駿選手。少年時代から夢見た大舞台。「誰もが認める野球好き」の、甲子園での躍動に期待します。



真新しいバッティンググローブは小学生の頃から野球を教えてもらっている方から、県予選前に貰ったそう。楽しさも含め、野球のすべてを教わったと駿選手。自分らしい粘り強いバッティングをすると誓いました。

写真提供＝谷尾みさき 撮影

Syun Mugiuda History

夢の舞台で挑戦する麦生田駿 選手の歩みを振り返る

2004年2月15日生まれ

試合の帰りに兄弟でフェリーのうどん。

2004年2月15日に麦生田家の次男として生まれました。5歳上の麟さんの影響もあり小学1年生からソフトボールへ。

2010年　小学1年で田代ソフトに入団

当時、田代ソフトの6年生は馬庭さくらさんと2人。人数が足りず池田ソフトと合同チームで出場していました。

2016年　田代中学校野球部に入部

樟南高校へ旅立つ日に集まった同級の野球部男子

中学では同級生の男子全員が野球部へ入部。「仲間と野球ができることに感謝しかないとよく言ってました」と母の才子さん。

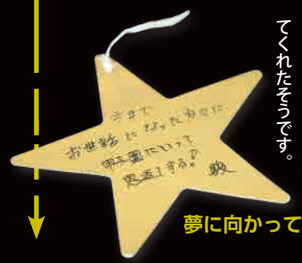
2019年　樟南高校野球部に入部

野球でさらに高みを目指したいと進学した樟南高校。これまでの成長を見守ってくれていた、祖母のリツ子さんも入学式へ。

（写真提供㊤＝谷尾みさき 撮影）

2021年8月14日　悲願の甲子園出場

初戦は大会6日目の第3試合で三重高校と対戦



樟南高校では寮長も務めている駿選手。県予選が始まった7月、寮に飾られた七夕飾りには「甲子園に行って恩返しする！」と力強く願いを込めて書いていたと、寮母さんが届けてくれたそうです。

夢に向かって、さらなる高みへ——。

自宅の壁にひたすら投げ続けた駿選手を見守っていた

駿選手が育った表木自治会 **竹下 和洋**（かずひろ）さん（55）

「ばーちゃーん！」と大声で帰宅する駿をよく覚えています。祖母リツ子さんが野球の相手をしてました。ピッチャーを始めたころはよくリツ子さんを座らせてピッチング。ばあちゃんっ子でしたね。時間さえあれば壁にボールを投げてました。裏表のない素直な駿。甲子園での活躍を表木のみんなが願ってます。

小学生時代の6年間を指導した監督からエール

田代ソフトボールスポーツ少年団 **川畑 正英**（まさひで）監督（56）

打撃では体が開くクセはあったが手首は強く長打が打てるバッターでした。特に肩は強かった。キャプテンも務め、誰よりも真面目という印象が残っています。練習後も「球を受けてほしい」と人一倍熱心に向き合っていました。その頃の初心を忘れず甲子園の舞台でも目の前の一戦を大事に戦ってほしい。そしていつまでも野球を楽しんで。

小1から高3まで12年、笑って泣いて励まし合った

鹿屋中央高校3年 **馬庭 さくら** さん（17）

駿とは小学生からソフトを始めました。中学でも一緒に野球部へ。高校はそれぞれ離れましたが、駿は野球、私はソフトボールを続けました。寮の公衆電話に電話して泣いたり笑ったりと今でも最高の仲間です。駿は誰よりも野球が好きと断言できる。夢だった甲子園では、がむしゃらで泥臭い駿らしいプレーを期待してます。

6年間、駿選手が白球を追いかけた田代ソフトボール

離れていても後輩たちは全力で応援してます

「駿の甲子園出場が決まった瞬間に発注した」と話す鶴園健次郎育成会長。横断幕は駿選手が6年間汗を流した田代中央グラウンドに設置されています。応援には行けませんが「駿くんがんばれー！」と大声で撮影。